No. 129

ティーブレイク

Tea Break

山登り

弁理士試験の受験生は，5月に短答式試験が終わると，一転して論文式試験の雰囲気になり，一段と殺気立ってくる。

けれども，論文試験に合格するためには，知識を入れるだけではなく，点数に結びつく知識を選別して書けるようにならなければならない。言い換えれば，あるところに拘って書き過ぎると，別の箇所では項目落ちが起こって，全体的な点数を低下させることになる。ある意味，「書く」ことが「欠く」ことに繋がるのである。

ここで，書き過ぎのパターンには，大体2種類ある。それは，知っているところをたくさん書く人と，知らないところをたくさん書く人がいる，ということである。現に，日常生活でも，知らないところをうまく取り繕おうとして，論理的に欠陥のあるところでついつい多弁になってしまう人がいる。

この一方で，自分の知っていることばかりをしゃべり過ぎ，相手方の話を全く聞かない人もいる。相手方からの情報が何も得られないばかりか，相手に反論の隙を与えてしまったり，下手をすれば反感をもたれてしまったりする。「人間というのは，自分の長所で失敗する」といわれる所以である。

このように，論文試験では，単なる知識や理解の正確性だけではなく，ある意味，その人の人生観や時間の使い方といったような特性までもが試されているようなところがある。

これに関し，先ほどは「書く」ことは「欠く」ことに繋がる，というようなことを言っているが，そうであるのは，通常の論文試験では，書くべきことを書く時間よりも，書くのに与えられている時間のほうが少ないからである。論文試験においては，時間収支は常に赤字なのである。

けれどもそれは，何も論文試験に限ったことではない。そもそも弁理士試験全体がそうである。そう，弁理士試験においても，勉強のために割ける時間というのは，十分な勉強のために必要な時間よりも常に少ない。ここでも時間収支は常に赤字である。

しかしながら，時間というのは，増やすことができない。一見して増やすことができるように見えるのは，要は，気付かないうちに他の時間を削っている，というだけのことである。ここで，同じ「土日を使う」ということ一つをとっても，それが「知らぬうちに大事な他の時間が削られている」という時間の奴隷であるのか，それとも，「意識して，あえて大事な他の時間を削っている」という時間の主人であるのか，ということについては，外観上は全く区別がつかない。

ところで，プロの世界には，入口だけがあって，出口が無い。そこにあるのは，寿命の終焉による突然の幕切れだけである。そして，「生きていた証だけが残る」という，まさに卒業“後”証書のような世界である。

であればこそ，黙祷で名前を読み上げられるのはともかくとして，後世に残るような実績を出せるのかということは，時間の奴隷で終わるのか，それとも時間の主人になるのかという，まさに自分の自覚の世界でしかない。

とすれば，たかが論文試験などとは言っていられない。時間収支が赤字の世界で，どのような自覚を持って取り組むのか。それによってその後の世界が大きく変わることを思えば，少々の苦は買ってでもすべきものである，ということになるであろう。

（正）